

田坂広志「風の言葉」

仕事の思想

はじめに
なぜ働くのか

第一話

思想 現実に流されないための錨

仕事の思想 目次

- 第一話 思想 現実に流されないための錨
- 第二話 成長 決して失われることのない報酬
- 第三話 目標 成長していくための最高の方法
- 第四話 顧客 こころの姿勢を映し出す鏡
- 第五話 共感 相手の真実を感じとる力量
- 第六話 格闘 人間力を磨くための唯一の道
- 第七話 地位 部下の人生に責任を持つ覚悟
- 第八話 友人 頂上での再会を約束した人々
- 第九話 仲間 仕事が残すもうひとつの作品
- 第十話 未来 後生を待ちて今日の務めを果たすとき

はじめに

なぜ我々は働くのか

私が新入社員として民間企業に入社したことです。

その年に入社した新入社員たちは、各地にある工場に分かれて配属になり、半年間の新人研修を受けました。

その新人研修のころのことは、すべてが懐かしい思い出ですが、そのなかでも、最初に給料袋をもらったときのこと、深く印象に残っています。

新入社員一人ひとりが初めての給料袋を手渡されて食堂に戻り、顔を合わせたとき、仲間一人のY君が給料袋を見つめながらつぶやいたのです。

「ああ、これで自分の人生を会社に売り渡したのか……」

この言葉に、仲間の多くは思わず笑い声を上げました。たわいもない冗談だと思ったでしょう。しかし、私は内心、笑えませんでした。なぜならば、彼の真剣な気持ちが伝わってきたからです。

Y君は、大学時代、演劇の世界に没頭し、できることならば演劇の道を歩みたいという夢を持っていたのです。しかし、そうした青春の夢も現実の壁に突き当たり、彼は結局、民間企業への就職という道を選んだのでした。

私は、入社以来、このY君から、社員寮の部屋で夜遅くまでそうした話を聞かせてもらっていました。だから、私は、彼の気持ちがわかるような気がしたのです。そして、そこには、私自身の気持ちも重なっていたように思います。

しかし、こうしたY君のような気持ちは、多かれ少なかれ、誰しも就職に際して抱いたことがあるのではないのでしょうか？

誰しも、青春時代には夢を描きます。自分の将来に夢を描き、そうした道を歩むことを願います。しかし、自由な学生生活も終わりに近づき、就職という時期を迎えるとき、その「青春の夢」を追い続けるのか、それとも、現実を理解して「大人の道」を歩むの

かの選択を迫られます。そして、その青春の夢をあきらめ、大人の道を選んだとき、その夢が大きければ大きいほど、深い挫折感を味わうのでしょうか。

このY君のつぶやきは、そうした挫折感の溜め息でもありました。

もちろん、Y君のような挫折感を感じることなく就職する人もいますでしょう。就職というものに夢を描き、自分の希望する企業に入社することができた人です。

しかし、こうした幸せな人にとっても、かならず挫折感はやってきます。なぜならば、希望したはずの会社で仕事を始めると、就職前には見えていなかった現実の厳しさが見えてくるからです。ときには、その会社でやりたかった仕事やらせてもらえず、やりたくない仕事をやらされることもあるでしょう。また、やりたかった仕事をやらせてもらっても、思ったようには仕事が進まないということもあるでしょう。

そうした意味では、就職して実社会で働くということは、多くの場合、青春時代に描いた夢が破れるということであり、志した目標が挫折するということでもあります。

そして、夢破れ、目標を失ったとき、私たちのこころに浮かぶのは、次の問いです。

なぜ我々は働くのか？

その問いです。

もちろん、この問いに対して、「飯を食うため」という素朴な答えがあることはたしかです。しかし、この答えに納得してしまえる人は、かならずしも多くはないでしょう。なぜならば、そうして飯を食うために働いている時間もまた、まぎれもなく、私たちの人生における、かけがえのない時間だからです。

だから、私たちは、Y君の「ああ、これで自分の人生を会社に売り渡したのか……」という言葉にささやかな共感をおぼえるのです。

もちろん、いまどき実際に、社員の人生を給料で買ったと思う企業はありませんし、また、自分の人生を給料で売り渡したと思うビジネスマンもいないでしょう。Y君でさえ、本当にそう思っていたわけではないのです。

しかし、私たちが油断をすると、気がつけば「給料で自分の人生を会社に売り渡した」

という状態になってしまうこともたしかなのです。

だから、そうした状態になってしまうことに対する自分自身への警句として、Y君は「ああ、これで自分の人生を会社に売り渡したのか……」「とつばやいたのでしょう。そうつぶやくことによって、決してそうした状態にはならないと、自分自身に言い聞かせたのでしょう。

では、私たちが、「給料で自分の人生を会社に売り渡した」という状態になってしまわないためには、どうすればよいのでしょうか？

そのためには、ひとつの問いを問い続けることです。

なぜ我々は働くのか？

その問いを、胸中深く問い続けることです。

しかし、この問いに対しては、誰も答えを教えてくださいません。もちろん、職場の先輩や上司に聞けば、その人なりの答えを教えてくださいられるかもしれませんが。けれど、その答えは、あくまでも、その先輩や上司にとっての答えであって、私たち自身にとっての答えではないのです。

だから、この問いに対しては、私たち自身の答えを見出していかなければなりません。私たちが自身が、日々の仕事に取り組みながら、「自分にとっての答え」を見つけていかなければならないのです。

このシリーズ・トークは、この問いを、自分自身の力で問い続けようとする方々のために開催されました。

「仕事思想」

それが、このシリーズ・トークのテーマです。

なぜ我々は働くのか？

その問いを、深く問い続けていただくために、「思想」「成長」「目標」「顧客」「共感」「格闘」「地位」「友人」「仲間」「未来」というキーワードをとりあげ、全10回のシリーズとしてお話ししました。

本書は、その記録です。

最後まで読んでいただければ幸いです。

一九九九年九月一二日

田坂広志

第一話

思想

現実に流されないための錨

ある友人の就職

「仕事の思想」

それが、このシリーズ・トークのテーマです。

しかし、このテーマを聞いて、皆さんのこころのなかには、次のような疑問が浮かんでいるのではないのでしょうか？

そもそも、なぜ、仕事には思想が求められるのか？

そこで、このシリーズ・トークの第一話においては、まず、そのことについてお話ししましょう。

はじめに、私にとって、長くこころに残っているひとつのエピソードを紹介させていただきます。

一九七四年の春のことです。私が大学の卒業を迎えようとしていた時期でした。そのころ、ある友人と交わした会話が、いまもこころに残っています。

それは、卒業後の就職先についての会話でした。

その友人は、同じ大学の教育学部の学生だったのですが、その学部の多くの学生がその道を進むように、彼もまた、教職の道を選んだのでした。そして、それは、ある高校の教師の職でした。

しかし、私は、彼から就職先として選んだ高校の名前を聞いて、内心、驚きました。

なぜならば、彼が選んだ高校は、エリートたちが集まる受験校でもなければ、裕福な家庭の子弟が集まる名門校でもなかったからです。

いや、それどころか、彼が選んだのは、むしろまったく逆の評価を得ている高校だったのです。

落第、退学、非行、校内暴力……。

そうした問題がしばしば眉をひそめて語られる高校だったのです。私も教職の道には興味を持っていましたので、たまたまその高校のあまり芳しくない評価を知っていました。だから、私は、思わず、彼に聞いたのです。

「君も、あの高校の悪い評判は聞いているだろう。それなのに、なぜ、君はあの学校を選んだんだい？」

そのときの彼の答えが、いまも忘れられません。

彼は、決して気負つことのない静かな口調で、こう答えたのです。

「たしかにあの学校は、非行や校内暴力が問題になっている高校だよ……。だけど、そうした学校にこそ、本当の教育が必要なのではないだろうか……」

その友人の、その言葉を聞いて、私は深く考えさせられました。

なぜ我々は働くのか？

そのことを考えさせられたのです。

なぜならば、この友人は、そのことに対する明確な答えを持っていると感じたからです。周囲の学友たちが、経済的な報酬や将来の地位が約束された道を選んでいくなかで、あえてそうした道を選んだ彼は、「なぜ我々は働くのか？」という問いに対して、彼なりの明確な答えを持っていると感じたからです。

荒波に流されないための錨

あれから、もう四半世紀の歳月が流れました。

その友人とは、それ以来、一度も顔を合わせていません。だから、ときおり彼のことを思い出し、ふと、考えます。

彼は、いまもなお、あの高校で、あのころの気持ちを失わずに教職の道を歩み続けているのだろうか、それとも、その気持ちはすでに失われてしまい、いまは他の学校で現

実に押しつぶされながら教師の仕事を続けているのだろうか、と。

もちろん、それは、いまの私には、知るよしもありません。

もしかしたら、彼は、すでに変わってしまったのかも知れない。あれほどの気持ちを持って教職の道に就いた彼も、やはり現実の壁に突き当たっているのではないだろうか？ そして、その厳しい現実の前に、挫折を余儀なくされているのではないだろうか？

そんな思いが、胸をよぎります。

なぜならば、その現実の壁の厳しさも、その挫折の苦しさも、ほかの誰でもない、この私自身を感じ続けてきたことだからです。そして、そのことは、おそらく現在の社会で働く多くの人々が感じ続けてきたことだからです。

社会の現実とは、青春時代のロマンチズムやナルシズムを生き残らせてくれるほど、なまやさしいものではない。

そのことは、現在の社会で働く多くの人々が、深い挫折感とともに感じ続けてきたことなのです。

しかし、そうした現実の壁に突き当たり、挫折の苦しさを味わったにもかかわらず、なぜか、私はいまも、こころの片隅で信じているのです。

彼は、きつと、あのころの気持ちを抱き続けて困難な教職の道を歩み続けているのではないだろうか。四半世紀の歳月を経ても、彼の気持ちは失われてはならず、その気持ちはますます深まりをみせながら、その道を歩む彼を支え続けているのではないだろうか。

私は、なぜか、いまも、そう信じているのです。

なぜならば、あのとき彼の言葉から伝わってきたものは、決して、単なる青春時代の甘いロマンチズムやナルシズムではなかったように思われるからです。それは、人生の困難や障害によって、いともたやすく風化してしまうようなものではなかったと思われるからです。

あのとぎの彼の、気負うことのない静かな口調から伝わってきたものは、決して、そうしたものではありませんでした。

あのとぎの彼の言葉から伝わってきたものは、まぎれもなく「思想」でした。それは、まぎれもなく、ひとつの「思想」でした。

「だけど、そうした学校にこそ、本当の教育が必要なのではないだろうか……」

その彼の言葉は、「なぜ我々は働くのか？」という問いに対する、彼なりの答えを明確に表明したものでした。

それは、おそらくは、「仕事の思想」とでも呼ぶべき、明確な「何か」だったのです。そして、おそらくは、彼は、そうした「仕事の思想」を「こころに抱くこと」によって、それを「錨いかり」にしようとしたのでしょう。

彼とても、これから一艘いっそうの小舟で漕ぎ出さんとする実社会という海原の、荒波の激しさも潮流の激しさもわかっていたはずです。そして、それがわかっていたからこそ、そ

の現実の荒波や潮流に流されてしまわないようにするための「錨」を求めたのでしょう。いかに厳しい荒波がやってこようとも、どれほど激しい潮流がやってこようとも、決して流されてしまわないために、「仕事の思想」という重い「錨」を、「こころの深くに降ろそうとしたのでしょう。

だから、私は、そうした「仕事の思想」の大切さを教えてくれた彼に、いまでも、感謝しています。

世にあふれる「サバイバル」の思想

そして、私は、仕事において困難に直面したとき、いつも彼のあの言葉に励まされてきました。

私は、仕事において困難に直面したとき、彼の言葉を思い出します。

そして、思うのです。

それなりの大学を出て、希望すれば好きな学校を選べる立場にあった彼が、あえて、誰も選びたがらない困難な道を選んだことの意味を。

そして、その彼の後ろ姿が、「なぜ我々は働くのか？」という問いを、私に思い出させてくれるのです。

ときおり、私たちは、仕事において困難に直面し、苦労を体験するとき、その仕事から逃げ出したくなることがあります。そして、そうした困難や苦労のない「楽な仕事」はないものかと考えてしまいます。

しかし、そうした考えに支配されているとき、私たちは、人生における「仕事」というものを「パンを得るための手段」と考えてしまっているのです。そして、どうせ「パンを得るための手段」であるならば、「楽な仕事」のほつがよいと考えてしまつのです。しかし、それは、ある意味で、「我々は生活の糧を得るために働く」という思想にほかなりません。

そして、こうした「仕事の思想」は、いまの世の中にあふれています。

就職雑誌などをにぎわす「高年収が保証される人気職業」や「有給休暇の多い優良企業」などの特集は、私たちのこころのなかにあるそうした「仕事の思想」を映し出しているのでしょうか。

しかし、こうした「仕事の思想」が、逆に、私たちから本当の「仕事の喜び」を奪つ

てしまっていることを見失ってはならないでしょう。生活のために毎日自分の労働力を切り売りしているという感覚は、その仕事に関わっている毎日の何時間かを無味乾燥なものにし、私たちのかけがえない人生を色褪せさせてしまいます。

おなじように、いまの世の中にあふれているのが、「サバイバル」と「生き残り」の思想です。

書店にいけば、「サバイバル」や「生き残り」というタイトルのついた本や雑誌特集が目につきます。「こんな企業はサバイバルできない」「こんなビジネスマンは生き残れない」といったセンサーショナルな見出しは、おそらくは、企業やビジネスマンの「危機感」を煽り、書籍や雑誌の売上を伸ばそうという出版社側の意図なのでしょうが、問題は、そうした「サバイバル」と「生き残り」の思想が、私たちのこころのなかに忍び込んでくることです。

いつのまにか、私たちは、「どうやったらサバイバルできるか？」「どうすれば生き残れるか？」という思想に染まってしまっているのではないのでしょうか？

しかし、私たちがこの時代に一生懸命に仕事をするのは、決して「生活の糧を得るため」でもなければ、「生き残るため」でもありません。

それは、より価値ある「何か」のためではないのでしょうか？

しかし、その「何か」を見出すためには、深みある「仕事の思想」が求められます。

よりよく働くためには、深みある「仕事の思想」が求められるのです。

マズロー的ピラミッドの底辺

かつて、心理学者のエイブラム・マズローが「欲求の五段階説」というものを論じています。

人間の欲求は、第一段階の「生存の欲求」、第二段階の「安全の欲求」、第三段階の「帰属の欲求」、第四段階の「尊敬の欲求」、第五段階の「自己実現の欲求」という段階を、下から一つひとつ実現しながら上がっていくという説です。わかりやすくいえば、「衣食足りて礼節を知る」という世界でしょうか。

人間にとっては、まずとにかく、「生存」するということや「安全」に暮らすということ

とが最も根源的な欲求であり、それらが実現できて、はじめて欲求は、さらに上位の「帰属」や「尊敬」、「自己実現」などの欲求に向かっていく。そういう考えです。

もし仮に、このマズローの説が正しいならば、これほど高度に発達した資本主義国であり、最先端の科学技術が開花した先進国の日本において、いまだにビジネスの世界にあふれているのは、残念ながら、この「マズロー的ピラミッド」の最底辺の思想にほかなりません。

いかにして仕事の世界で生き残るのか？

いかにして安全で楽な仕事を見つけるのか？

いまの日本においては、そうした「生存の欲求」と「安全の欲求」のレベルの最底辺の思想が、「仕事の思想」として影響力を持ってしまっているのです。いまの世の中で目につくのは、そうした貧困な「仕事の思想」なのです。

私は、そのことに、深い疑問を持ち、ビジネスの世界を歩んできました。

そして、その疑問は、ひとつの問いに結びついています。

なぜ我々は働くのか？

その問いを、このシリーズ・トークにおいて、深く考えてみたいと思います。

そして、この問いを考えることをつうじて、深みある「仕事思想」とは何であるかを探ってみたいと思います。その思索の旅を、これから皆さんとともに歩んでみたいと思います。

そして、その思索の旅を導くのは、あの友人が四半世紀を超えて私のこころに残してくれたメッセージへの感謝です。

この「風の言葉」は、
1999年に『仕事の思想』として、
PHP研究所から出版されました。

仕事の思想

- 第一話 思想 現実に流されないための錨
- 第二話 成長 決して失われることのない報酬
- 第三話 目標 成長していくための最高の方法
- 第四話 顧客 こころの姿勢を映し出す鏡
- 第五話 共感 相手の真実を感じとる力量
- 第六話 格闘 人間力を磨くための唯一の道
- 第七話 地位 部下の人生に責任を持つ覚悟
- 第八話 友人 頂上での再会を約束した人々
- 第九話 仲間 仕事が残すもうひとつの作品
- 第十話 未来 後生を待ちて今日の務めを果たすとき